

暖地小麦の追肥時期について

野田健児*・茨木和典*

NODA, K. & IBARAKI, K. Upon the Most Effective Time of Top-dressing of Nitrogenous Fertilizer on Wheat Cultivation in the Warmer District of Japan

1. 1953~54年に、暖地春蒔理感温性小麦農林61号について、生育相的観点から穂肥適期を研究した。

2. 試験方法は11月25日播種。株間2×2寸、1区2坪3区制乱塊法、基肥反当硫酸1貫、過石6貫、塩加2貫とし、追肥処理は硫酸4貫を幼穂長1mmの小穂分化末期より幼穂長16.3mmの小花内諸器官分化完了までの間に5~10日毎に9回液肥で施与した。

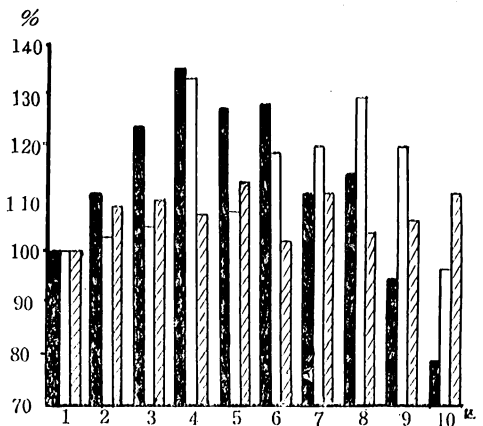
3. 収量は幼穂長2mm、小花分化期、草丈22cm時の処理区において最高値を示し、該区を遠ざかるにつれ増収率は低下した(第1表)。出穂、開花期についても、該区の遅延日数2日を最高として、増収率と平行する遅延傾向を示す。

4. 増収の主因は、穂数の増加、とくに3号分けつ等の高次分けつの有効莖化によるもので、2次的に1穂粒数の増加がとくに後期処理区で貢献している(第1図)。

5. 暖地麦類は、栄養、生殖両相の長期重複、有、無効莖分岐過程の不鮮明なる生育相を有するので、こ

れに伴つて穂肥増収機作も若干特異な型をとるのではないかと推定される。

第1図 各収量構成要素の標準区に対する比数



左より穂数(黒部分)、粒数、粒重(斜線部)

第1表 子実収量の比較 (3区平均)

| 処理区 | 主穂穂長 | 同分化度* | 収量 g/2坪 | 比 数 | 処理区 | 主穂穂長 | 同分化度* | 収量 g/2坪 | 比 数 |
|-----|------|-------|---------|-------|-----|---------|-------|---------|-------|
| 1 | cm | 無追肥 | 1,023 | 100.0 | 6 | 0.30 cm | X | 1,513 | 147.9 |
| 2 | 0.10 | VII | 1,398 | 136.6 | 7 | 0.67 | X | 1,313 | 128.3 |
| 3 | 0.14 | VII~K | 1,413 | 138.1 | 8 | 1.16 | X | 1,477 | 144.1 |
| 4 | 0.20 | K | 1,540 | 150.5 | 9 | 1.37 | | 1,327 | 127.7 |
| 5 | 0.25 | K~X | 1,538 | 150.3 | 10 | 1.63 | | 1,185 | 115.8 |

* 和田氏の分類基準による。

*九州農業試験場